

生きる
今、生を考

相棒は介助犬！

介助犬を知っていますか？

特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター・副理事長 木村 佳友

障害者が「人」としてあたりまえに「生きる」ことについて真つ向から考えていきたい、との思いから「今、生きるを考える」シリーズを創設しました。今回は「介助犬」と生活を共にする木村佳友さんに、「もつと『介助犬』のことを知って欲しい」という思いをこめ、これまでの体験を踏まえて語っていただきました。

皆さんは、介助犬を知っていますか？

「名前は知っているけど、詳しいことは分からない」という人も多いと思います。

盲導犬が「目」、聴導犬が「耳」の不自由な人を手助けするように、介助犬は「手」や「足」が不自由な人の日常生活動作を手助けします。日本では、障がい者をサポートする犬として、これら三種が法律で認められていて、総称して身体障害者補助犬（補助犬）と呼びます。

ここでは、私の生活や経験を交えてお話しすることで、『介助犬の役割や現状』などについて少しでも理解を深めて頂けると嬉しいです。

◆不自由な生活

私は、エンジニアとして働いていた二七歳の時、交通事故で頸髄を損傷し、車いすの生活を余儀なくされました。下肢だけでなく、腹筋や背筋、上肢にも障がい残り、握力も失いました。結婚して一年余りの頃です。家族にも迷惑をかけ、「死んでしまえば良かった」と涙に暮れていました。

それでも、妻や家族、周りの方々に励まされ、リハビリ訓練に取り

組み、車いすながら自宅での生活を始め、在宅勤務で職場復帰も果たしました。ただ、日中は妻が仕事で出かけ、ひとりで仕事をするようになります。落したものが拾えず仕事が中断する、車いすから転落しても妻が帰ってくるまで床でもがいていたなど、不自由なことが沢山ありました。

◆介助犬は、肢体不自由者の頼もしい相棒

そんな頃、心の安らぎを求めて、ラブラドル犬のシンシアを飼いはじめました。そのシンシアが、私たちの人生を大きく変えます。

雑誌で目にした介助犬の記事をきっかけに、シンシアは訓練を受け私の介助犬になりました。日本で三番目の介助犬です（一九九六年）。シンシアは、落とした物を拾う、電話を持つてくる、外出先の駐車場でパーキングチケットを取るなど、私の不自由な生活をサポートしてくれます。

冬のある日、家の駐車場で車いすから車に移ろうとして転落してしまいました。家には誰もいません。このままでは、凍えてしまうところでしたが、シンシアに「テイク電話」と指示して、寝室にある電話機を持つて来てもらい、お隣さんに助けを求めることが出来まし



▲駐車場でチケットを取る

た。頼もしいシンシアに、感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。

◆同伴拒否…

しかし、当時は介助犬が数頭しかおらず、法の規定もなく、存在すら知られていませんでした。そのため、レストランやスーパーなどに出かけると、介助犬はペット扱いされ、同伴を拒否されました。交通機関にも乗れません。その度、悲しい思いをして、シンシアとの外出を諦めかけました。

でも、私がシンシアと一緒に出かけないと、介助犬を知ってもらう機会が無くなってしまいます。そのため、「断られてもいいから、とにかく介助犬のことを知ってもらおう」と考えて、シンシアと一緒に出掛けけるようになりました。新たな介助犬使用者が、私と同じ苦労をしなくて済むように！という一心です。

そんな時、初めて行ったレストランで、店長さんが洪々ながら「今日は、特別ですよ」と受け入れてくれました。私たちが食事をしている間、テーブルの下で大人しく待っているシンシアの様子を見ていた店長さんが、帰るときには笑顔で「こんにちは お利口さんなら、いつ来てもらっても大丈夫ですよ」と言ってくれました。

この経験から、介助犬を受け入れてもらうには、介助犬を実際に見てもらい理解してもらうことが必要だと実感しました。

◆介助犬の公的認知を求めて！

介助犬を受け入れてもらう活動を続けていると、活動を応援してくれる人や介助犬の講演を依頼してくれる人などが現れ、少しずつ支援の輪が広がっていきました。



▲レストランにて

私が暮らす宝塚市では市立施設への同伴を認めてくれましたし、全国の店舗で同伴を認めてくれる企業も出てきました。乗車試験を受ける必要がありました。一部の鉄道も利用できるようになりました。これらの活動は、新聞やテレビでも取り上げられ、特に毎日新聞は介助犬キャンペーン報道を展開するなど、大きく後押ししてくれました。

当初は法律なんて夢にも考えていませんでした。しかし、全国で介助犬の同伴を受けて入れてもらうには、法的に認めてもらう必要があります。国会や厚生労働省にも足を運び介助犬の必要性を訴えました。そして、賛同してくださった国会議員の方々が中心となって一九九九年に「介助犬を推進する議員の会（議連）」が発足しました。議連では、使用者や訓練事業者のヒヤリング、国内外の現状・法制度などの調査が行われ、厚生労働省には「介助犬に関する検討会」が設置されました。

介助犬に関する法律を目指していましたが、道路交通法で規定されている盲導犬ですら施設への同伴を認める規定はなく、同伴拒否が絶えない状況であることもわかり、盲導犬、さらに聴導犬も加えた法律を目指すことになりました。

そして、本当にたくさんの方々のご支援とご協力により、二〇〇二年五月二二日に「身体障害者補助犬法」が成立しました。

◆身体障害者補助犬法

この法律によって、公共施設や公共交通機関だけでなく、レストランやホテル、病院などの不特定多数が利用する民間の施設にも、補助犬同伴の受入が義務付けられました。

しかし、二〇年が経った現在も、同伴拒否は無くなっていません。補助犬の同伴拒否は、障がい者を拒否することであり、人権侵害で

す。法務局から説示を受けた宿泊施設や運輸局から行政処分を受けたタクシー会社もあります。さらに、障害者差別解消法では、補助犬の同伴拒否は、「不当な差別的取扱い」として禁止されています。

補助犬法の目的である「障がい者の自立と社会参加の促進」を理解して、補助犬の同伴を快く受け入れていただくように願います。

◆ 介助犬はかわいいぞっ

残念ながら、「介助犬は嫌々仕事をしている」や「介助犬は仕事のストレスで寿命が短い」などと誤解している人がいます。

介助犬は、適性のある候補犬を選び、喜んで介助ができるように訓練されています。電話やリモコンは、ボール遊びの延長で持つて来てくれますし、携帯電話などは、宝物探しの感覚で探してくれます。

ずっと作業しているわけではなく、散歩にも行きますし、大半は遊んだり昼寝したりしてくつろいでいます。使用者は、健康診断やワクチン接種など、介助犬の健康管理に務めています。

平均寿命の調査では、介助犬が二三・〇歳、盲導犬が二二・九歳と、純血種の飼い犬の二二・八歳と同じくらいです。

「介助犬は短命」や「介助犬はかわいそう」などという誤解をなくして下さい。

◆ 未来を担う子どもたちに期待！

施設を利用する際に、「子どもの頃に、シンシアの講演を聞きました」と言ってくれる職員の方にとときき出会うことがあります。私が講演で「大人になって、お店に介助犬を連れた人が来たときには、優しく受け入れてくださいね」とお願いしたことを、心がけてくれるそうです。

子どもの頃に、補助犬について学んだり、触れ合った経験のある人

は、補助犬を優しく受け入れる姿勢が自然に身につくように思います。そのため、宝塚市では、道徳の授業で必ず補助犬について学びますし、毎年開催している補助犬シンポジウムは、数年前から子どもたちにも関心を持ってもらえる内容に変更しています。

◆ 介助犬シンシアが残したもの

シンシアをきっかけに始めた小さな活動が、多くの方々の支援や協力によって、『やさしさの輪』となって少しずつ広がり、補助犬法の成立につながりました。

障がい者や補助犬が自由に社会参加できる街は、障がいのない人にとっても住みやすい街だと思っています。宝塚市では、皆さんからの寄付によって、『すべての人にやさしい街づくり』を目指すシンボルとして、JR宝塚駅にシンシアの銅像が設置されています。

補助犬法二〇周年を機に、皆さんが、障がい者や補助犬に関心を持つて、自分のこととして考えてくださることを願っています。

木村 佳友 プロフィール

一九六〇年 大阪市生まれ。一九八三年 三菱電機入社。一九八六年結婚。一九八七年 交通事故故により車いす生活となる。一九九六年 介助犬シンシアとの生活を始める。講演など、介助犬の普及啓発に取り組む。厚生労働省の検討会委員を務めるなど、身体障害者補助犬法の成立にも尽力。二代目のエルモを経て、現在は三代目のデイジーと生活している。著書『介助犬シンシア』は、『シンシアく介助犬誕生ものがたり』としてテレビドラマ化され、アジ

